

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：72681

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12211

研究課題名(和文) 宗教共同体における周期的儀礼と経済の研究 禅清規に記される役職交代と交割を中心に

研究課題名(英文) Seasonal Rituals and its Economic Aspects in Zen Monasteries

研究代表者

金子 奈央 (KANEKO, Nao)

公益財団法人中村元東方研究所・その他部局等・専任研究員

研究者番号：00558538

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：住持や役職者の交代等、禅宗清規に記される周期的儀礼の実施には、新たな人間関係を結び直して宗教共同体の維持と組織的結束を強化する性格があると考えられる。このような組織的結束に欠かさない側面として、役職交代に伴う交割やこうした儀礼における身体性・共同飲食・いくつかのモノが指摘できる。役職交代時に確認できる立位の転位や、共食や茶湯礼がこれにあたる。モノについては、新住持入院の際の視篆(寺印の目視確認)儀礼において、禅宗清規が中国から日本に受容されるとその対象が寺印から寺券へと変化するなど、文化や時代に即した変容も確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文献学的読解に基づいた成果を、宗教学や関連学領域の学知と接合させる本研究は、従来研究が手薄であった記述的な仏教儀礼研究の進展に寄与しうる。禅宗清規に記される周期的儀礼が宗教共同体の組織的結束と維持に重要であること、この他、視篆儀礼については中国および日本の清規関連文献を用いて、禅儀礼の変容が存在することを確認できた。

近年、コロナ禍における共飲食の実施が問題となったが、これは個人の心がけの問題と言うよりは、深く根付いた文化的慣習の問題である可能性もある。本研究で取り上げた周期的儀礼には共飲食が伴うケースが多かった点から、こうした問題の文化的背景について考察する契機となった。

研究成果の概要(英文)： In this study, I examined functions of replacement rituals enacted periodically, which are depicted in most of Chan/Zen Pure Rules. These rituals, such as entrance and ordination of a new abbot, and replacements of officials, are usually accompanied by (1) jiaoge交割, which means a confirmation of temple's assets and properties, (2) tea and/or hot-water ceremonies, sometimes with light meals or snacks. These ceremonies are based on hierarchical (or vertical) and horizontal relationships as to a temple's administration. And (3) it can also be pointed out that physical positions and movements of an abbot and officials play important role in these rituals. Three aspects of rituals mentioned above have functions to facilitate and stabilize an ordination of a new abbot and replacements of officials, furthermore provide stability and sustainability with an administration of a monastery.

研究分野：宗教学・宗教史学

キーワード：宗教法 禅宗清規 宗教儀礼 宗教共同体 宗教と経済

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究の背景

一般に、禅清規の研究史では燈史資料などの記述に基づき、「清規の創始者」とされる百丈懐海は自給自足的叢林を主張していたと信じられてきた。そのため、叢林における経済的要素は、一種の「墮落」と見なされる傾向が存在してきた。本研究では叢林における経済的要素の持つポジティブな側面に光を当て、経済的要素は儀礼や教義と一体化し、宗教共同体の維持に寄与しているのではないかと考え、研究を行ってきた。

(2)本研究の動機

研究代表者は、中国・日本の禅宗清規・関連文献に記載されている送葬儀礼の一つである唱衣法（住持や僧侶が死亡した際にその遺品を競売にかけるといった儀礼）を讀解し、こうした文献学的分析を基礎として、唱衣における遺品・貨幣・教義という要素、及び、唱衣に関わる三者（叢林権威・僧侶・死者）間におけるこれらの要素の交換について宗教学的観点から研究を行ってきた。

この研究の進展によって、以下の成果を得ることができた。すなわち、送葬儀礼を構成する唱衣法とは、宗教共同体としての叢林・寺院に発生した死という危機（構成員の死）とそこからの再生・新生というサイクル（周期性）に関わる、経済的性質を持つ儀礼であると想定しうる。住持が死亡した場合は、その葬送儀礼は新しい住持の入院をもって完結することを考えると、唱衣法は住持の交代という宗教共同体の新生サイクル（周期性）とも関わる。また、送葬の流れにおいて、一次葬後二次葬以前に唱衣が行われることから、唱衣は行き場のない死者の遺品（死の表象）を貨幣との交換（経済性）によって、安全に共同体内に環流させる役割をも担っていると考えられる。

宗教共同体を一種の生命体になぞらえれば、宗教儀礼・組織（役職など）はその構成要素、すなわち細胞にあたりとされる。こうした共同体の構成要素の持つ周期的な新生・再生という性質が、宗教共同体の再生と維持を下支えしていると考えられる。

ここから、叢林・寺院内の新生・再生サイクル（周期性）やこれに伴う儀礼・経済的要素の様相、宗教儀礼やその経済的側面が、宗教共同体の維持にどのように関わるのか、についてより広く考察することが必要となると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、唱衣法の宗教学的研究を土台として、禅宗清規に記載される、叢林の周期性（住持の入院儀礼や役職交代）に関わる儀礼や、これに伴う経済的側面である「交割」（寺院財産の確認点検および補填）の記述につき文献学的に分析し、こうした文献学的分析を基礎として、叢林内の周期的儀礼とその経済的側面が、宗教共同体の維持とどのように関わるのか、宗教学的観点から考察する。こうした文献学的讀解を基礎とした宗教学的考察によって、共同体の構成要素である役職の周期的新生や再生に関連する儀礼・これに伴う経済的側面と、宗教共同体の存続・維持との有機的関連を明らかとすることを目的とした。

3. 研究の方法

中国および日本で撰述された諸清規・清規関連文献を主たる対象とし、まずはそれらに記載される周期的儀礼の記述を対象として讀解を行った。具体的には新住持の入院儀礼や役職交代、およびこれらに伴う交割の記述を対象として讀解した上で、その教義的意義のほか、宗教共同体としての叢林の組織的結束の様相について宗教学的観点から考察を行った。

新住持入院の儀礼のうち、特に視篆（寺印の目視確認）儀礼については、中国から日本へと清規が移入され定着してゆく過程で目視対象に変容が発生した点についても清規関連文献から確認した。

研究を進める際には、禅叢林における財産・「モノ」の意義について、貨幣による社会関係の維持機能や近年進展している「モノ研究」の視点から、宗教共同体に経済的・物質的要素が与える積極的役割を考察することを心がけた。仏教儀礼の記述的研究・宗教学的・社会科学的観点からの研究は、学的領域の狭間に位置するという事情もあり日本では手薄であったため、文献学的分析に基づいた成果を宗教学や関連学的領域に蓄積された学知と接合させる方法を意識して研究を進めた。

4. 研究成果

本研究は、その研究上の目的と意義から、中国及び日本における諸清規・清規関連文献の讀解

を基礎とし、こうした基礎の上に宗教学・社会学において蓄積されてきた理論や学知を用いて考察を進めた。以下、年度ごとに分けて成果を記す。

(1)2018(平成三十)年度

2018年度は中国禅宗清規類に記載された禅宗清規における交割の事例、および交割の際に使用される帳簿の記述を中心として読解作業をすすめた。これを土台として、交割に関わる記述に見られる「互用」や「別用」に関わる罰則に焦点を当てて、中国仏教における戒律解釈文献にその用例と源を探り、この背景には役職交代時を含めて寺院財産を維持する意識が存在すると考察した。この成果については、平成30年度の日本印度学仏教学会第69回学術大会にて「禅宗清規における「互用」とその背景」と題して研究発表を行い、『印度学仏教学研究』第67巻第1号に同名の査読論文が掲載された。

この他、研究テーマの一つである周期的儀礼に関わる一面として、禅宗清規に記載される葬送において重要な役割を果たす「モノ」真影や鉢盂などの意義についても考察を行った。その成果としては、日本宗教学会第77回学術大会での「葬送における死者の表象-禅宗清規の事例から」と題した研究発表や、東洋大学東洋学研究所・研究発表例会での「『徹通義介喪記』における衣と鉢盂 <物質文化研究>の視点から」と題して研究発表を行った。

(2)2019(令和元)年度

2019年度には、『勅修百丈清規』に記載される住持の死と新任住持の入院儀礼、およびこれに伴う「視篆」の儀礼・交割の記述について、その教義的意義を確認するとともに、宗教共同体の継続という観点から考察した。この成果を、「住持の交代をめぐる表象について 禅宗清規の記述から」と題して、日本宗教学会第78回学術大会(2019年9月14日)において発表し、この概要は『宗教研究』別冊93に掲載された。この他、中国撰述の諸清規に記される住持以外の役職者(知事・頭首など)の役職交代に関わる次第・儀礼が記される項目について、交割という経済的側面の他、その交代の次第・儀礼の特徴として身体性や飲食を伴う特徴などが指摘できる事が分かった。

(3)2020(令和二)年度

2020年度には、中国撰述の諸清規を中心に、住持や諸役職の交代(「両班進退」)の記述の読解を継続した。これらの次第に伴う茶湯礼についても、参加する僧の寺院内外での地位に注意を払いつつ、宗教共同体の維持継続という観点から考察した。ここから、住持の交代・役職交代の際の経済的儀礼に加えて、交代の際の共食や茶湯礼には、寺院・叢林内という組織における垂直・水平レベルの人間関係との連動性が確認でき、これが組織の新生と組織的結束の強化に資すると考察した。この考察は、「日・韓・中国国際仏教学術大会」において「宗教的共同体における役職交代-禅宗清規にみるその理念と意義」と題して発表を行い、この論考は『東アジア仏教学術論集』第9号(第9回日韓中国国際仏教学術大会記録)に掲載された。さらにその後は、中国撰述の諸清規に記される役職交代に関わる次第・儀礼(交代の次第の他、交割などの経済面、茶湯礼などに代表される共飲食儀礼)が、日本の諸清規文献・関連文書や史料においてどのように受容されているのか、読解と確認に進んでいる。

(4)2021(令和三)年度

2021年度においては、住持・役職交代の際の入院儀礼のうち、寺院の経済面の統括者としての住持の役割に関わる視篆(寺印の確認儀礼)について、中国撰述の諸清規における視篆の記述に留まらず、日本に禅が移入された中世から近世初期までに確認可能な諸清規・清規関連文献における入院儀礼も射程として、入院儀礼を構成する一儀礼としての視篆が、日本中世期の禅宗においてどのように変容を遂げたのか確認した。近世期の学僧・無著道忠の指摘にもあり、中国諸清規に記される視篆の枠組みは日本においても受容されていたものの、新任住持の入院の際には、時代を下るに従って目視確認の対象が寺印から寺院財産の証書である寺券類へと変容したことが確認できた。この考察については「日本の諸清規および関係文献・史料における役職交代について-新任住持の入院における「視篆」を中心に-」として日本宗教学会第80回学術大会において発表を行い、『宗教研究』第95巻別冊(第80回学術大会紀要特集)に収録された。

(5)2022(令和四)年度

2022年度においては、日本の禅寺院における入寺儀礼を中心に、清規関連文献や、著名な禅寺院の歴史文書を対象として読解を進めた。日本の禅寺院では、入寺儀礼における寺院の確認儀礼(視篆)が中世期に途絶えて、寺券の確認儀礼に取って代わられていた事はすでに述べたが、無著道忠の指摘によれば、近世期に一部の寺院において寺印確認儀礼としての視篆が復興したという記述がその著書に記されている。無著道忠が指摘した事例はおそらくは元禄期前後の相国寺であることから、相国寺の寺史関係の史料類の読解を進めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 金子 奈央	4. 巻 第95巻別冊
2. 論文標題 「日本の諸清規および関係文献・史料における役職交代について」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『宗教研究』	6. 最初と最後の頁 200-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金子 奈央	4. 巻 第9号
2. 論文標題 「宗教的共同体における役職交代 禅宗清規に見るその理念と意義」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『東アジア仏教学術論集』	6. 最初と最後の頁 267-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金子奈央	4. 巻 93巻別冊
2. 論文標題 「住持の交代をめぐる表象について」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『宗教研究』	6. 最初と最後の頁 pp.299-300
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金子 奈央	4. 巻 第67巻第1号
2. 論文標題 「禅宗清規における「互用」とその背景」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『印度學仏教學研究』	6. 最初と最後の頁 232～237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金子 奈央	4. 巻 92巻別冊
2. 論文標題 「葬送における死者の表象 - 禅宗清規の事例から」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『宗教研究』	6. 最初と最後の頁 365 ~ 366
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 金子 奈央
2. 発表標題 「『徹通義介喪記』における衣と鉢盂 <物質文化研究> の視点から」
3. 学会等名 東洋大学東洋学研究所・研究発表例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金子 奈央
2. 発表標題 「日本の諸清規および関係文献・史料における役職交代についてー住持の入院における「視篆」を中心にー」
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子 奈央
2. 発表標題 「宗教的共同体における役職交代 禅宗清規に見るその理念と意義」
3. 学会等名 「第9回 日・韓・中 国際仏教学術大会」(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金子奈央
2. 発表標題 「住持の交代をめぐる表象について 禅宗清規の記述から」
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子 奈央
2. 発表標題 「禅宗清規における「互用」とその背景」
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金子 奈央
2. 発表標題 「葬送における死者の表象 - 禅宗清規の事例から」
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------